



253号
2020/5

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp 2018/7/1



伝統舞踏の会場にて：伝統舞踏を見物する巴底（地名）の小母さん、茶色いガウンはヤク毛製、織り目が付いたスカートの舞踏衣装 黒色はギャロン女性の伝統衣装の基調色。

（2009年10月、四川省丹巴県にて 四姑娘山自然保護区特別顧問＝大川健三 撮影）

‘わんりい’ 2020年5月号の目次は20ページにあります

今月もまた、日本語の四字成語辞典では取り上げられていない言葉です。

・＞・＞・＞・＞・＞・

昔、秀才（科挙合格者）が夜道を歩いていて、大金の入った財布を拾いましたが、彼はこのことを誰にも話しませんでした。翌日朝早く、秀才はこの財布を持って拾った場所へ行きました。すると、丁度、辺りをキョロキョロと落としたものを探している人がいたので、何を探しているのか尋ねました。その人が説明した財布の様子は、秀才が拾ったものと全く一緒だったので、拾った財布をその人に返しました。その人は非常に喜んで、その財布の中からその一部を御礼に渡そうとしましたが、秀才はそのお金は受け取らず言いました：

「拾ったのはあなたのお金ですが、もし返さなければ、全額私のものになったのですよ。」

つまり、私はそのお金の一部を貰うためにあなたに返したわけではありません。」

実はこの人、知識人ですがとても貧しい生活をしていました。それなのに、大金の入った財布を拾っても、決して自分のものにしようという気は起こしませんでした。これこそ四字成語に言う「拾金不昧」で、まれに見る立派な行いです。

・＞・＞・＞・＞・＞・

言葉の意味：金＝本来はお金のこと、この言葉では各種貴重な品物も含む。昧＝密かに隠す。自分のために使う。

使用例：我々は皆、各自拾った金を猫糞（ネコババ）してはいけない。

・＞・＞・＞・＞・＞・

このお話、清代の「客窗閑話（客窓閑話）」と言う本に出て来ますが、このことを簡潔に言い表す日本語はありません。日本では、態々言わなくても当たり前のこととされているからでしょうか。

実は、この幼稚園児用絵本で、この種のお話はこれで2回目です。昨年7月号でご紹介した「路

不拾遺（路不拾遺）」も、「道に落ちているものを誰も拾わない」と言うのが、孔子の目指した理想の社会だと紹介しています。その時筆者は、20年近く前に山西省の田舎で体験したことをお話しましたが、当時は、一旦身体から放したものは二度と戻らないことが殆どでした。

どうしてこんなことが起こるのかと考えた時に、中国の人々の合理的な考え方が影響しているのではないかと思います。中国には、「管子」の中の「衣食足りて礼節を知

る」と言う言葉がよく知られているのですが、当時の中国はまだ発展途上で、今ほど豊かではなかったもので、持主がいらないものを見つけた時は放っておかないで、自分のものにすることが当然だと、合理的に考えたのではないのでしょうか。

豊かになった現在、「拾ったものを自分のものにしてはいけない」ということを小さい時から教えているのでしょう。聴くところによると、最近の中国では、各人の社会的信用度に点数を付けて、そのスコアによって汽車や飛行機、劇場の切符などの購入で優遇されたり、時には購入を拒否されたりするそうです。就職や結婚にも、このスコアが影響してくるのだそうです。



挿絵 満柏氏

上邪 漢代樂府

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

じょう や
上 邪

かん だい が ふ
漢代樂府

ああ、あなた
あなたの愛を知った今
私の心は終わらない
山が崩れて
河が涸れ
冬にごろごろ雷鳴って
夏に雪降り
天と地の合わさった時
愛しいあなたと離れもしましょ

「上邪」とは敬愛する人に対する呼びかけの言葉です。この詩は北宋の郭茂倩の編纂した『樂府詩集』(鼓吹歌・鐃歌十八首)の中の一詩として採録されているものですが、残念ながら曲調は伝わっていません。鐃とは軍中で鳴らす銅鑼のこと。鐃歌とは軍楽隊による鼓吹曲のことです。この詩は一見、戦争とは関係ないようですが、この進軍ラップのような激しい愛の告白は、軍楽のリズムに相応しいものであったのかもしれませんが。

一方、この詩は君主に対する忠誠心を詠ったものとする説もあります。だとすれば『君が代』が思い起こされます。『君が代』は、実は『古今集』読人知らずの歌から採ったもので、歌い出しは「君が世は～」でなく「我が君は～」になっています。「我が君」とは尊敬する人に対する呼びかけです。ひょっとしたらこれも愛の告白であったかも…。

〔訓読〕

じょう や
上 邪

われきみ あい
我君と相知り
としえに すいぜつ な
長しえに衰絶無からしめんと欲す
りょう
山に陵無く
こう すいため つ
江水為に歇き
とう らい しんしん
冬雷震震として
ゆき ふ
夏に雪雨り
てん ち
天地合わされば
すなわち あえ た
乃ち敢て君と絶たん

〔原詩〕

shàng ya
上 呀

hàndàiyuè fǔ
漢代樂府

shàng yá
上 呀

shàng yá
上 呀

wǒ yù yǔ jūn xiāng zhī
我 欲 与 君 相 知

cháng mìng wú jué shuāi
长 命 无 绝 衰

shān wú líng
山 无 陵

jiāng shuǐ wéi jié
江 水 为 竭

dōng léi zhèn zhèn
冬 雷 震 震

xià yǔ xuě
夏 雨 雪

tiān dì hé
天 地 合

nǎi gǎn yǔ jūn jué
乃 敢 与 君 绝

中原旅行記 (2) 2020年1月1～6日

橋 詰 滋

■1月3日 洛陽へ

6時に起床し、7時半にホテルをチェックアウトしました。外は北京よりも西に位置しているためか、7時半なのにまだ暗かったです。

ホテルから高铁の駅に向かうため、地下鉄で移動します。

中国では地下鉄の駅の改札に、X線による荷物検査がありますが、これには毎回うんざりさせられます。検査の機械が自分の腰よりも高い位置にあるため、検査の都度、重いスーツケースを持ち上げなければなりません。検査に携わる係員は必要数以上配置されているものの、手が空いている人はおしゃべりやスマホに夢中で、誰も手伝ってくれません。

地下鉄に揺られ20分くらいで西安北駅に到着し、高铁の構内に入場するために荷物検査と身分証明書(外国人はパスポート)チェックを受けました。高铁の乗車券には、パスポートナンバーと氏名が記載され、本人しか使用できません。日本みたいに誰でも使える乗車券ではなく、人々の移動状況を政府が把握している感じがします。

8時半には改札となり、ホームに降りました。高铁の車両は日本の東海道新幹線のN700系に似ている感じがします。



高铁の車両

2000年代初頭には、まだ高铁是北京・上海間くらいしかなく、その後、20年もしないうちに、総延長距離は2万キロあまりに達しています。日本では1964年に、東海道新幹線が開業し、50年くらいかけてようやく、函館から鹿児島までの区間が新幹線で結ばれました。一つの新幹線について、計画から開業まで20～30年くらいかかるのに、中国では20年もしないうちに、2万キロも開業してしまうのには驚かされます。

乗車する列車はG1896 浙江省の温州南行きであります。私は途中の洛陽龍門までの1時間半の乗車でしたが、最後までこの列車に乗車する人はいるのだろうかとふと考えてしまいました。

高铁は出発の案内もなく、定刻通りに出発し、数分もしないうちに、速度は300キロを超えました。ただ、外の景色は防音壁等に囲まれているため、あまり楽しむことができません。

列車は定刻通りの10時17分に洛陽龍門駅に到着しました。この駅は龍門石窟の近くであります。スーツケースを持ったままの観光は難しいため、一旦、タクシーでホテルまで移動し、荷物をホテルに預けた後、龍門石窟に向いました。

龍門石窟は北魏時代の494年より掘削を開始し、唐の時代まで200年くらいかけて整備された仏教遺跡で、山肌に複数の石像が彫られています。川を挟んで両側に石窟がありますが、西側がメインになります。チケットは石窟、香山寺、白園への入場がセットになり、90元であります。

西側の石窟は2キロくらいにわたって点在し、2キロ先の西側の石窟の最終地点には東側に渡る橋があるものの、橋は工事中のため渡ることができず、また川を横断する船も休業中のため、来た道に戻るしかありません。西側の出発地点に戻った後、カートで東側に渡り、東側の石窟を見物しました。東側の石窟より、川を挟んだ西側の石窟を見た光景は世



ピースサインの石像

界史の資料集に出てきたものそのままであります。

東側の方は、あまり修復が進んでいなくて、そのままでの形で残されています。また足場が悪い部分もありますので、行かれる方は注意してください。

東側を見物後、香山寺へ、その後に白園に行きました。白園は白居易の墓であります。白居易は日本でも有名な詩人であり、日本から寄贈された石碑が至る所にありました。

石窟、香山寺、白園の見物に、4時間を要し、この後、白馬寺に向かいました。白馬寺までは、バスで移動すると、一度、洛陽市内まで移動しなければならず、時間がかかりますので、ここはタクシーを利用しました。タクシーで一部高速道路を飛ばして、20分での移動となりました。ただこのタクシー運転手は、スピード違反、あおり運転、割り込み、携帯電話での通話をしながらの運転をしていたため、非常な危険を感じました。

白馬寺は中国最古の仏教寺院で、いくつもの仏教建築物があり、インド、ミャンマーやタイから寄贈された建物もあります。中国に来たのに、東南アジアを観光している気分を味わいました。

ここで1時間弱の見物をした後、洛陽の旧市街に向かうために、タクシーを探していたところ、龍門石窟から白馬寺まで乗ってきたあのタクシーに再び当たってしまいました。他のタクシーを探すのも面倒なので、仕方なく乗車するしかありませんでした。今度ばかりは危険運転をしないように祈って乗り込みましたが、相変わらずの危険運転でした。日本な



牡丹蓋

らこんなタクシーは営業停止処分ですね。

旧市街に到着した後、麗景門を見物しました。麗景門は隋代に建造された洛陽の街を守る門であります。訪問時は夕暮れ時だったためか、ライトアップが非常に幻想的でありました。

洛陽と言えば牡丹であります。麗景門の真下に牡丹をモチーフとした工芸品店があり、ショーウィンドウには牡丹の花の模型を飾った皿（牡丹蓋）が陳列してありました。陳列したある皿を見て、一瞬購入を考えましたが、花びらの部分が繊細で割れやすい状態であることから、持ち帰りが困難なため、諦めるしかありません。ショーウィンドウを眺めて、写真に収めるだけにしました。

夕食を旧市街でとることにしました。洛陽名物と言えば、水席であります。どの店も「御一人様お断り」の感じがして、入店する勇気はなく、小さな食堂で不翻湯という酸味が効いたスープに固いパンみたいなものを入れて食べる料理を食べました。

食後はホテルに戻り、近くにあるマッサージ屋でマッサージを受けました。足裏マッサージ、肩のマッサージのセットで38元という破格の安さでありました。若い女性のマッサージ師であったため、あまり力がかからなかったが、心地よく、身体が軽くなった感じがしました。マッサージの途中で、128元の皇帝マッサージを勧められましたが、財布をホテルに置いて100元しか持参してなかったため、断りました。ただ、この皇帝マッサージコースの内容が気になります。

マッサージ後は、ホテルに戻り、22時半頃に就寝し、長い1日は終わりました。（続く）

范成大の「四時田園雜興」其三十一 と楊万里の「閑居して初夏午睡より起く」

報告：花岡風子

今回のお題は二首とも南宋の詩人の作品でした。范成大は1126年生まれ、楊万里は1127年生まれなので、一歳違いです。この二人に以前紹介した陸游を加えて南宋の三大詩人と言われている。陸游は1125生まれですから、三人はそれぞれ一歳違いで、互いに親密な交流を重ねています。

范成大が生まれた1126年は卞梁（今の開封）が金の襲撃を受けて陥落した歴史的な大事件（靖康の変）の年でした。その後宋は、国土の半分にあたる長江から北の領土を奪われ、都を南方の杭州に移さざるを得なくなりました。その上、多大な貢物を捧げて金に朝貢することを義務付けられ、金を兄とし、宋を弟とするという、屈辱的な関係を強いられました。このことから南宋王朝内では、領土を取り戻すべし、と考える“主戦派”と、金と屈辱的講和を結んででも経済発展を維持していく考えの“和平派”との間で、激烈な政争が繰り広げられました。この主戦派と和平派の対立は、中国では今でも日本の忠臣蔵のように、京劇や地方劇のテーマの一つになっています。

岳飛と秦檜の芝居に夢中になりすぎた観客が興奮のあまり、秦檜役（和睦派の首領）の役者さんに罵詈雑言を浴びせたり、殴り倒したりしたこともある、と私も以前どこかの本で読んだことがあります。

さて、役人としての范成大は非常に優秀で楊万里と同じ年に科挙の試験にも合格し、主戦派の外交官として活躍しました。副宰相の要職に就いたこともあります。しかし晩年は故郷に隠遁し、沢山の田園詩を作り、田園詩人として後世に名を残しました。

この時代の詩の特徴は、一般に平仄が非常に

安定しており、型破りの詩は殆どないそうです。この背景の一つには、中唐の頃から徐々に整備されてきた科挙制度が、宋代には更に一層完備され、この時代の詩人のほとんどは科挙に合格した官僚によって占められていました。そしてその科挙の予備試験には必ず作詩があるので、型破りの詩は次第に評価の対象外になっていったことが挙げられるそうです。

また、静かで落ち着いた写生風の作品が多いのもこの時代の特徴です。その背景は、宋代以後、軍事費を抑制する一方で、南方貿易と田園開発によって国全体が経済的に安定し、豊かな時代が実現したからです。領土の北半分を奪われ、仮の都を杭州に置いた南宋以後も、この傾向は続き、豊かさは人々の心に余裕をもたらし、文化の発展を後押ししました。軍事的には弱体化し、屈辱的な外交を強いられたものの、経済は潤い、都市文化は更に発展しました。一方で、杜甫や李白、あるいはその頃の辺塞詩に代表される、雄渾さを売り物にした盛唐風の作品は影を潜めます。

さて「四時田園雜興」は范成大晩年の作です。長大な組詩になっていて、全部で六十首もあります。今回取り上げられた作品はそのうちの31番目のものだそうです。この詩に限らず、現在の日本では、宋代の詩は唐詩に比べるとあまり読まれないのですが、中国では教科書に載っているような著名な作品も数多くあり、特にこの詩は小学校の教材にも必ず出てくる、人気の作品だそうです。一方、この一連の組詩は江戸時代の日本でも相当に人気を博し、時の漢詩人たちが挙って作詩のお手本としたそうです。「季節感があり、農村のほのぼのした情景を題材に取り、自然を細かく観察しているところなんか、

じっくり読むと日本人にぴったりくるものが多いんですね。」と植田先生。

では、作品を読んでみましょう。

し　じ　でんえんざつぎょう
「四時田園雑興」 其三十一
はんせいだい
范成大

ひる　いで　た　くさぎ　よる　あさ　つむ
昼は出て田を耘り夜は麻を績ぐ
そん　そう　じ　じょ　おのおの　あた
村莊の児女は 各 家に当る
どう　そん　いま　こうしよく　きょう　かい
童孫は未だ耕織に供するを解せず
ま　そういん　そ　うり　う
也た桑陰に傍うて瓜を種うるを学ぶ

sì　shí　tián　yuán　zá　xīng　qí　sān　shí　yī
四时田園雑興 其三十一
fàn　chéng　dà
范成大

zhòu　chū　yún　tián　yè　jì　má
昼　出　耘　田　夜　績　麻
cūn　zhuāng　ér　nǚ　gè　dāng　jiā
村　庄　儿　女　各　当　家
tóng　sūn　wèi　jiě　gòng　gēng　zhī
童　孫　未　解　供　耕　織
yě　bàng　sāng　yīn　xué　zhǒng　guā
也　傍　桑　陰　学　种　瓜

この詩は初夏の農家の風景を詠んだものです。一句目の「昼は出て田を耘り夜は麻を績ぐ」は、昼は田圃に出て雑草を刈り取り、夜は麻を績ぐ。「耘」という字は「くさぎる」と訓読します。雑草を刈り取ることです。初夏によく見かける農作業の一つです。またここでの「耘田」は農作業一般を指すと見ることもできます。この出だしの一句では、昼夜を問わず忙しく立ち働く農民一家の様子が頭に浮かびます。二句目の「村莊の児女は 各 家に当る」は、村の息子や娘らはそれぞれ一人前に家族の役目を担っているという意味ですが、ここでの児女とは、成長して家族の一員として働く息子や娘らということです。この時代の中国では一般に野良に出て働くのは男たちの仕事で、女たちは家事労働の後、夜は専ら屋内で糸紡ぎや機織りに従事し

ていました。「各 家に当る」とはその事を指しています。三句目、四句目の「童孫は未だ耕織に供するを解せず、也た桑陰に傍うて瓜を種うるを学ぶ」とは、幼い孫たちはまだ、農作業のなんたるかは分からないけれど、桑の木の木陰で、大人の働く姿を見ながら瓜の苗を育てる真似事をしている。「童孫」とは幼い孫たちの世代を表しています。「耕織」は耕作と機織りの仕事を指します。「種」とは本来の意味は「種を撒く」ことですが、一般には「うり」と訓読し、栽培するという意味を表します。ここでいう「学ぶ」とは人真似をすることです。

長閑な農村の何気ない一日、一家総出で働いている農民の様子が生き生きと伝わってきます。孫たちも遊びながら、大人のマネをしている。これはどこの国でも共通で、かつては誰もが目にした情景ですね。農作業に勤しむ家族の姿をありのままリアルに描き出しています。

さて、この詩では親子三代、一家総出で働く農民の姿が恰も画像のように映し出されていますが、これまで一家を支えてきた老農夫の姿がどこにも見当たりません。しかし何度も読み返してみると、孫たちが手本にしている祖父の、桑の木陰で黙々と瓜の苗を育てる姿が浮かんできます。この詩の作者は、画面に現れない語り手としての老農夫の目を通して、農民たちの労働の喜びと尊さを伝えたかったのかもしれない。

「これまでの田園詩といえば、農民の苦しみを訴えたものや、隠遁生活を謳歌しつつ、時の政治を批判したものが多くありましたが、安定期の南宋の時代にはこのような、ほのぼのとした庶民の幸せを描いた作品も、結構多いんですね」と植田先生。

二首目の「閑居して初夏午睡より起く」の作者である楊万里も気骨ある主戦派の優秀な官僚でしたが、言いたいことをズバズバ言うので、何度も左遷され、最後は隠居して田園生活に入

ったそうです。では、その楊万里の作品も見てください。

かん きょ しょ か ご すい お
閑居して初夏午睡より起く
ようばん り
楊万里

ばい し さん とど し が よわ
梅子酸を留めて歯牙を軟む
ばしやうみどり わ そう さ とも
芭蕉緑を分ちて窓紗と与にす
ひ なが ねむり お じやう し な
日長く睡より起きて情思無く
かん じ どう りやう か とら
閑に児童の柳花を捉うるを見る

xián jū chū xià wǔ shuì qǐ
閑 居 初 夏 午 睡 起
yáng wàn lǐ
楊 万 里

méi	zǐ	liú	suān	ruǎn	chǐ	yá
梅	子	留	酸	軟	齿	牙
bā	jiāo	fēn	lǜ	yǔ	chuāng	shā
芭	蕉	分	绿	与	窗	纱
rì	cháng	shuì	qǐ	wú	qíng	sī
日	长	睡	起	无	情	思
xiān	kàn	ér	tóng	zhuō	liǔ	huā
先	看	儿	童	捉	柳	花

＊「思」をsīと読むのは古い読み方です。この方が平仄に叶っています。

一句目「梅子酸を留めて歯牙を軟む」とは出だしから面白い表現です。梅子とは梅の実のことです。熟して食べられるようになって酸っぱい梅を食べると歯に染みる、というのです。どうも中国人は酸っぱいものは、歯に悪いというイメージがあるようです。「軟」とは、力が抜けて踏ん張りが利かない感じを表します。

二句目「芭蕉緑を分ちて窓紗と与にす」、芭蕉の緑が、薄絹を張った窓に映えている情景ですが、これは「芭蕉が自分の色を窓の薄絹に分け与えている」という植物を主語にした擬人的表現です。

三句目「日長く睡より起きて情思無く」、初夏の日長に、昼寝から目が覚めてぼうっとしてい

る状態。梅の実が熟す頃なので、六月頃でしょうか。旧暦では五月、ちょうど鬱陶しい梅雨時に当たります。昼寝から覚めてぼんやりしている作者の姿が目には浮かびます。蛇足かも知れませんが、「つゆ」を「梅雨」と書くのは、「梅の実が熟する時」という所から来ています。

四句目「閑に児童の柳花を捉うるを見る」とは、閑にまかせて見るともなく、子供らが柳の綿毛を追いかけている姿に目を遣る。「柳花」とは柳の綿毛、柳絮のことです。ふと昼寝から覚めたら、いきなり外から子供たちの歓声が聞こえてきたのでしょうか。どれどれ何を騒いでいるのかな、と外を見たら子供たちがふわふわと舞う柳の綿毛を追いかけて走ったり跳んだりする姿が視界に入る。それをまた作者は暫しぼんやりと眺めている。「これも写実的で、人間観察、自然観察の行き届いた詩ですね。盛唐の詩のようなロマンチックなところはなく、写実的で折り目正しく、控えめなところが宋代の詩の特徴です。最後に子供に目がいくというのが何とも可愛いですね」と植田先生。

「カタブツの主戦派の、心優しい別の一面が感じられ、それがまた人間の幅の広さを表しています。この詩人も范成大と同様、江戸時代に人気を博した詩人の一人です。楊万里の詩は小林一茶の俳句を彷彿させるという人もいます。ハエが手をする足をする、といった感じでしょうか。楊万里にも、ハエや雀など小動物をユーモラスに詠った詩があります。童心を備えた詩人と言いますか、これも宋代の詩の特徴ですね」とも。

毎回漢詩には心揺さぶられることの多いアラフォー女子ですが、今回の范成大と楊万里の作品には、ホッとするような心温まるものを感じます。のどかな農村の平和な風景は、江戸時代のイメージと重なるのも頷けます。落ち着いた大人の男性の父性がにじみ出た魅力的な作品ですね。

海外出張の思い出（クウェート編①）

高島敬明

私は会社人生で、三度の長期間の海外出張を経験しました。これまで書いてきたように最初がロシアの黒海周辺（ノボロシースクなど）、二度目がアフリカ中部のナイジェリア（ラゴスなど）でした。そして三度目が西アジア・中東に位置するクウェートでした。二度に亘る家庭を犠牲にした長期海外出張で、会社にはこれ以上海外出張は絶対行きません、と申し入れてありました。4月号がナイジェリアの最終回でしたが1年に亘る出張が終わり帰国したのは、昭和55年（1980年）のことでした。

昭和55年に帰国して約2年半が経ちました。そのころクウェートでは、KNPC（国策会社・クウェートナショナルペトロリアムカンパニー社）の石油精製工場の大規模な工事を日本のエンジニアリング会社N社が受注したのです。わが社はその重量機器などの据付工事を担当することになり、現場での直接工事に携わる者をT重機建設支店を中心に多くの技術屋集団、作業員を派遣し対応しました。すでに工事のピークは過ぎようとしていましたが、今後は工場の初回の運転（スタートアップ）に入っていくわけで、昭和58年8月になってN社は最初の運転要員を大量に確保しなければならなくなってきました。当社にもその要員の手配を依頼してきたのです。プラント機器と運転の接点での多くの問題を一つ一つ解決しなければならないわけです。

当時の日本は、好景気で建設現場は忙しくどの支店にも人員の余裕はありません。各支店には今までのお客との行きがかり上、何としても1名から2名を候補として推薦するよう命令が来ました。現場の経験のある技術屋は国内でも非常に仕事が忙しく余裕があるわけがありません。名古屋支店でも該当する人間は私一人でしたが、毎日忙しく2～3か所の現場を掛け持ちで仕事をしていました。内々に派遣



砂漠の中の製油所建設現場

候補に挙がっていた私の上司は、私が前回のナイジェリアを最後に海外工事には行かないと宣言していましたから人選を外部に漏れないよう、慎重に進めていたそうです。少し後になってとうとう私に派遣候補としての話がそれとなくありました。私にとって今回の派遣から逃げられないような話から切り出されました。この工事が始まる前、プロジェクト協力店として現地の下見、調査に2週間かけて行ったとのことでした。「高島君、これはエンジニアリング会社に対しても協力しなければならない社内の事情もある、どう考えても君しかいないんだ。何とか半年だから行ってもらえないか？」これに対し、私は上司やエンジニアリング会社の人からも個人的にお世話になっている事情もあり、「帰って家内と相談します」と返答するのがやっとでした。家内におそるおそる話をしましたが、案外簡単に承諾を得ました。当時のエンジニアリング会社は飛ぶ鳥を落とすほどの勢いがありました。当社からは3名が同社に出向という形になり、給料・海外出張手当など先方の基準になるとのことでした。単純に計算しても当社の倍くらいの給料になるのです。家内はそのことが一番嬉しかったようですし、期間が半年のことも喜んでいました。私は半年では済まないと覚悟をしてい

ましたが……。海外出張も3回ともなると深く感じることも少なく、思い出すことも少なくなっているように思いますが、徒然なるままに書いて行こうと思います。

●中東クウェート KNCP 石油精製工場建設工事

何時も慌ただしいのですが、派遣されることが決まればとんとん拍子に進んで行きます。国内工事の引き継ぎがまず最初です。N社での顔合わせと説明は、出向者は他社も含め10名以上いましたので心強く感じました。英会話が不得手な私にはナイジェリアで通関の仕事をしていた顔見知りの後輩、わが社のM君とペアーを組む感じでした。W大理工学部出身で英語力は抜群で、これで一安心です。現場での直接のオペレーターは100人以上のインド人たちです。これらの人を上部からの指示を伝え指導しながらオペレーションを進めて行きます。

クウェートへの旅立ちを前に砂漠の国・回教の戒律の厳しい国の状況を考えながら荷物をまとめて行きます。当然お酒はすべて税関で没収されますが、日本酒はジュースとして税関を通る人もかなりいたようです。とはいえ原則的には没収されます。すると液状でなく粉末状のアルコールはどうかと色々考えるものがあります。当時商品として出回っていた、水を加えるとアルコールになるという商品を手づてに聞いたので大量に買って持っていくことになりました。理論的には良くわからずそんな魔法のようなことが出来るのか疑問でしたがお願いしました。税関は無事通過しました。その他生活用品、薬なども自分用に揃えて持っていました。

飛行機は成田から午前中だったように記憶していますが、台湾・ベトナム・タイの上空を過ぎてインドに入りパキスタンのカラチに着いたときは真夜中でした。足腰も伸ばせない状況でぐったりしているときでしたので皆喜んでいました。ところが何か様子が違います。駐機場も真っ暗な場所でした。いきなり飛行機のドアが開き、饅えたような匂いのする生暖かい空気が入ってきてインドの小母さん連中が

10名くらいでしょうか、ビニールの大きな袋を持って入って来ました。袋に不要になったゴミを出してくださいとのことです。

結局空港のロビーに降りることもなく、清掃と給油を済ませると飛行機はすぐに真っ暗な空に飛び立ってしまいました。空港ロビーでの体を動かす運動と買物を楽しみにしていたのですが皆さんがっかりです。機内でうとうとと過ごしていましたが、明け方には砂漠の上空を飛行してお昼頃ようやくクウェート空港に着陸しました。飛行機がゆっくりと誘導路を移動しているとき、ボーッと機外を見てみると事故で破壊された旅客機の焼けた残骸が散らばっていました。何で片づけないのかな、と日本と違った光景を見て少しショックを受けました。また空港は海辺の空港かと想像していましたが、飛行機は予想に反して、海の全く見えない、町から相当離れた内陸で、黄色っぽい砂漠の真中に降りて行きました。非常な圧迫感、閉塞感を感じながら空港に入りました。日本人はやはり海を見ないと安心できないようです。

キャンプは空港から2時間くらい離れたところがありました。だだっ広い砂漠の中にコンテナハウスが規則正しく並べられていました。番号をよく見ないと自分のハウスが分からなくなります。キャンプの中は車での子来になりますが、決められた道路は無く緑の全くない土地を自由に行き来します。地面は砂漠というより土漠の様に固い粘土質の地面です。非常に小さい土の粒子で乾燥していることもあり、何時も露出した顔が砂ぼこりでざらざらになります。N社の建設現場と事務所はここから更に30分くらいのところにあり、毎日与えられたピックアップの車両で通勤するのです。現場はクウェートの南側のサウジアラビアとの国境から60km離れたペルシャ湾に面した漁港、アハマデ地区の「アルマハデ」という町でした。このような過酷なところで少なくとも半年間は作業が続けられていくのです。

(続く)

■ターナゲン湾の凍結

アンカレッジから南に向かうと、街に隣接してアラスカ湾から続く大きな入江があります。イギリスの探検家キャプテン・クックの指揮していた船がこの入江に入り、出口が無いのでターン・アゲイン（Turn Again）と言ったことからターナゲン入江と名付けられた美しい入江です。この入江は毎年冬には全面凍結するのですが、ここにアラスカ湾から鯨の群れが入り込み氷結した氷に閉じ込められて、外海に出られなくなる事件が毎年のように起こります。どこの世界にもドジな生き物がいるものです。地元の新聞やラジオに毎日大きく取り上げられるので、双眼鏡を持って多くの人が見に来たり、動物愛護者達が鯨を助けようとします。殆どの場合、アラスカは潮位の干満の差が大きいので氷が割れたり、人が救助に成功したりして鯨は助かるのですが、私は鯨を捕まえて食べてしまえばいいのにといつも思いました。北方の海では、エスキモーはこの様なきときはいつも神様に感謝し、これらの鯨を有り難く頂いていたと以前に本で読んだことがあります。

■燃料不足

飛行機の話に戻ります。飛行機は燃料が燃え尽きて無くなる前に絶対着陸しなければいけません。しかし、燃料が全て尽きて4つのエンジンが全て止まり墜落した例があります。1978年12月28日、ユナイテッド航空のDC8型機が、アメリカ西海岸のポートランド空港近郊の森の中に燃料切れで、全てのエンジンが止まり墜落し、多くの方が亡くなりました。原因は着陸の前に車輪の脚下げを示す指示灯が点灯せず、その処置に没頭して燃料切れになったのです。日本航空の安全資料によるとユナイテッド航空の航空機関士は燃料切れを何度か注意喚起していたのですが墜落を防げませんでした。

その約10年後の事です。成田からのフライトをパリのシャルル・ド・ゴール空港で引き継ぎパリとチューリッヒ・クローテン空港まで、片道約1

時間の往復の乗務をしたときの事です。パリからチューリッヒまでのフライトは天気もよく順調でした。チューリッヒからパリは副操縦士が操縦して戻ることにしていました。帰りの目的地パリの天気予報は晴れ一時曇り、万が一パリに何らかの事情で着陸できないときはロンドン・ヒースロウ空港を代替空港に選定し、余分な燃料を積まずチューリッヒ空港を離陸しました。パリの空港に着陸すべく天候をチェックすると、天気は急変し霧が発生して視程は着陸できる最低値まで低下していました。日本航空の規定では視程が所定値より悪いと副操縦に着陸させてはいけない決まりになっています。私が操縦を替わり着陸のため進入を開始しましたが、規定の高度でも滑走路が視認できず着陸復行しました。余分の燃料を積んでいなかったのが管制官に直ちにロンドン・ヒースロウ空港に行きたいとリクエストをしました。ヒースロウ空港はこの時混んでいましたが着陸した後エンジン停止後の残存燃料は、あと30分位の飛行が出来る程度しか残っていませんでした。通常少なくとも1時間以上飛行が出来る燃料を残します。この日は折良くロンドン発の成田行の便に空席がありチューリッヒからのお客様はロンドンで乗り換えられて成田に予定通り帰国することが出来ましたが、私はロンドンで燃料を補給しシャルル・ド・ゴール空港に戻り、日本に帰国するお客様のためにパリに戻りました。チューリッヒで出発前にもう少し慎重に天候をチェックして燃料をもう少し余分に積んでおけば、パリ上空で待機しシャルル・ド・ゴールに着陸できたかも知れません。お客様からも会社からも何の指摘も受けませんでしたが、機長報告書を書きながら反省しました。

■食事はどこが美味しいか？

仕事柄、多くの都市で宿泊し、食事をする機会があります。友人からは、時々どこの国の食事が美味しいかと訊かれます。私はやはり醤油味とおコメがすきで、辛いものも好きです。エビ、カニ、イカが好きで肉も大好きです。と言うことは東南

アジアの食事が気に入っているのですが、この時期はヨーロッパ線の乗務が多かったので、ここでちょっと、ヨーロッパの食事についての話をします。私の独断と偏見による感想ですから話半分に聞いて下さい。

先ずドイツ料理は一般に塩っ辛くて単純、皆似たような味付けで美味しくありません。ソーセイジ、ジャガイモ、豚足にビールも有るじゃないかと思われるかも知れませんが、うまいビールなんてドイツに限らずヨーロッパなら何処の国にもあります。ドイツでは中華料理さえ味付けは単純で美味しくありません。まずい料理はイギリスも有名です。

テレビドラマで名探偵ポワロさんもイギリスには美味しいものは無いと言っていました。ローストビーフとヨークシャーピングは有名ですが味付けはいまいちだと思います。ただかつて香港から中国人が沢山移住してきているので、中には、香港と同じくらい美味しい中華料理が食べられる店もあります。カートが回ってきて好きな料理を選ぶ本格的な飲茶レストランもあり比較的手頃な価格で食べられます。インドの本格的なカレー屋も多くあります。

パリのフランス料理は料金が若干高めですがやはり美味しいです。お勧めはフランス風にアレンジされた中華料理で味はかなり洗練されています。試される方は中高級店に行ってください。

B級グルメではベトナム料理店も多くあり、手頃な価格で楽しめます。オランダのアムステルダムは春になると大きなホテルではロビーの中に生のニシンを食べさせる屋台が臨時にオープンします。街でも運河沿いに所々でニシンの生を食べることが出来ます。美味しいです。インドネシアを植民地にしていましたのでインドネシア風の焼きめし、焼きそばも手軽に味わえます。

オランダ人は乳製品を小さいときから食べていたせいか男も女も背は高く、体もがっちりしていますが美人はあまりいません。これは食事に関係ありませんが。街のコンビニにジャガイモを主にしたクロケッテンという食べ物を串に刺して売っています。味は日本のコロケととても似ています。商店街にはチーズの専門店が何軒もあり多く



パリでの食事はカフェのテラスで

の人で賑わっています。沢山の種類のチーズをみてその豊富さと強烈な匂いに驚かされます。

ドイツ料理をけなしてばかりで気になりました。春先だけのメニューですがハンブルグで食べたホワイトアスパラガススープには春の訪れを感じました。大きなレストランでは自家醸造のビールを出しています。レストランのビールはリサイクルの瓶で買って帰ることも出来ました。

アメリカのファミリーレストランのスパゲッティはどこもぐちゃぐちゃで柔らかくひどいものです。私がよく食べたのはハンバーガー、ホットドッグ、チリビーンズ、後はビーフステーキでくらいでしょうか。チリビーンズはベーコンと挽肉、タマネギを入れ、トマトソースに白インゲンを入れ、チリペパーで味付けをして煮込んだものです。アメリカ原住民化した我が家の子供達は喜んで食べていましたが、私は美味しく感じませんでした。

ニュー・ヨーク、サン・フランシスコ、ロス・アンジェルスなどの大都市では本格的な美味しいものを出すレストランは幾つもあります。当時から日本料理店ばかりでなく、韓国料理や中華料理のレストランがどこにでもありましたから、食事には困りませんでした。私は不味くたってお腹が減れば何でも美味しく食べられる方ですが、仕事でしょっちゅう外泊していると多少こだわりたくなります。私は電気ポットをいつも持ち歩いていました。お湯さえ有れば紅茶、日本茶、昆布茶は勿論、即席味噌汁がいつでも飲めるからです。日本のホテルではホットポットが殆ど部屋に装備されていますが、当時外国のホテルでは必ずしも装備されていませんでした。

(続く)

愛新覚羅顥琦—お寿司大好き

和田 宏

愛新覚羅顥琦（1918年9月14日～2014年5月26日、享年95）さんは、川島芳子の妹である。清朝八大親王の一人、第10代肅親王善耆の末娘（第十七女）として、亡命先の旅順で生まれた。中国名は金黙玉。本人が日本語で書いた自伝によれば、姉の20歳の川島芳子が1927年、旅順で蒙古族のカンジュルジャップと結婚式を挙げた時に、9歳で参列し初対面している。12歳で旅順高等女学校に入学、長春高等女学校への転校を経て、1935年女子学習院へ留学。1940年日本女子大学英語科へ進学。

姉・芳子が「男装の麗人」として舞台化され、芳子を演じた初代水谷八重子を、顥琦は1934年有楽町の日劇で観て、“姉に似ている。”と語っている。女学生時代は姉の芳子に似て悪戯好き。1941年、日中戦争が激しくなったため帰国。戦後の北京で食堂経営や北京編訳社で翻訳の生活。反右派運動が激しくなり、1958年に逮捕され、そのまま1973年まで文革期15年の投獄生活。その後7年間農村での強制労働を強いられ、1980年やっと自由の身になる。

性格はさっぱりして、炎天下で労働をさせら

れた為になったと言うガラガラ声でどちらかと言うとガラッパチに近い。大柄で白いパンタロンを穿いてかっこ良かった。恨みや批判的なことは言わず、さっぱりした性格。女子学習院の同窓会では、丁寧語で、“あら、そうでございますの、オホホ・・”と喋った。1996年には河北省に日本語学校を設立。日本が大好き、お寿司が大好きだった。読書家で勉強好きな人。2014年5月26日未明、北京の病院で亡くなった時、日本のマスコミ人として最初にこの情報を耳にしたのが私だった。顥琦が来日する度に自宅に宿泊させていた「厚木市日本中国友好協会」の高橋美紗子会長に顥琦の息子が国際電話で知らせて来て、それを私に教えてくれたからである。直ぐさまNHK北京特派員に確認するように連絡をした。封建王朝・清が辛亥革命で倒れてから、100年余り後だった。その時詠んだ私の短歌。

♪清朝が

倒れてのちの

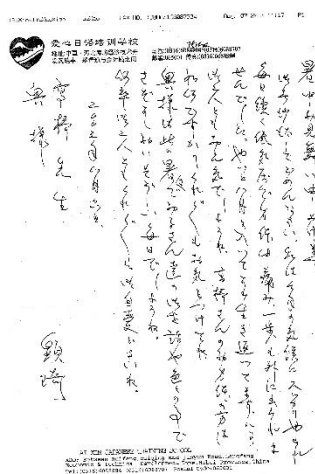
百年後

愛新覚羅

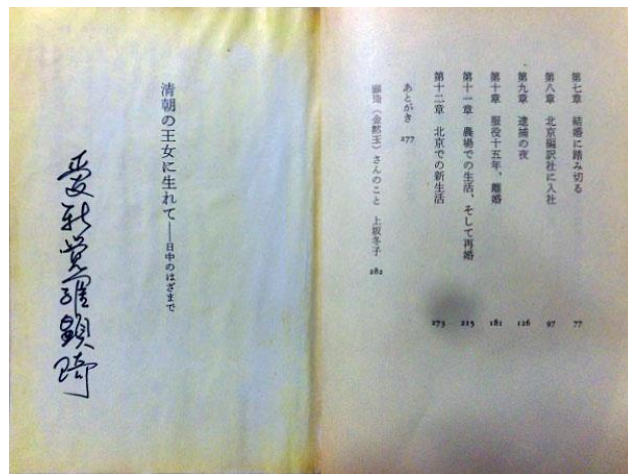
顥琦さん逝く



北京の日本語学校校長
(自著書籍から)



愛新覚羅顥琦さんの手紙



自伝本『清朝の王女に生れて』にサインして貰った

私は、「神奈川県日中友好協会」代表団として瀋陽市を訪問したことがある。瀋陽市は、奉天とも言う。日本が、『天皇を奉ずる』と言う意味で付けたのではなく、もともと、満州族（古くは女真族）の人達が奉天と呼んでいた。清朝を造った満州族の愛新覚羅氏の出身地で、北京の紫禁城とそっくりの大規模な故宮がある。また、軍閥の張作霖と張学良親子の故郷でもあり、彼らの実家や記念館などを訪問したこともある。指揮者の小沢征爾（1935年9月1日生まれ）は、満州時代の瀋陽市生まれ。歯科医で、満州国協和会創設者の一人だった父親が、1931年9月に起きた柳条湖事件『満州事変』の首謀者・板垣征四郎と石原莞爾から一字ずつ取って付けたそうである。

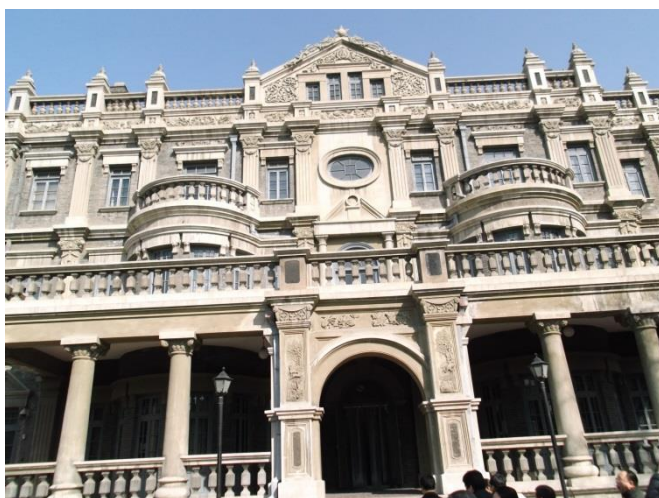
張学良は、1936年12月、共産党軍を掃討しろと督促に来た国民党軍の蒋介石を、逆に監禁して国共合作を強要した。これを『西安事件』と言う。国共合作に対して首を縦に振らない蒋介石に、共産党の周恩来が説得するため面会を訪れ、“やあ、蒋介石校長、お久しぶりですね？”と話しかけている。何故なら、黄埔軍官学校時代に、蒋介石は校長、周恩来は政治部担当を務めていたからである。

西安事件も終わったあと、張学良は、上官であり領袖と崇めていた蒋介石を監禁した事を恥じて自ら求めて蒋介石の下に走り、50年間、蟄居した。蒋介石が亡くなったあと、ハワイで余生を送り、2001年10月、101歳で亡くなった。昔の功なり名を遂げた中国人や日本人の男性は、側室の一人や二人を持ち、養ってあげるだけの経済力や思想があったが、クリスチャンの張学良は、そういうことはせず、終生一人の妻と連れ添った。

（「北京の『日本語学校校長』」以外は著者撮影）



学良が執務しているそっくり人形



張作霖・張学良親子の実家（2012年3月）



黄浦軍官学校の跡地。蒋介石が校長、周恩来が政治部担当
(2011年10月)

まず、前回(4月号)のつづきを一つ、ニコラス・クリストフ氏による論説中の気になる件「開封は世界中から人を引きつけ、多くのユダヤ人さえやってきた」について取り上げたい。実は、これとは別に、2008年3月に開封を訪れた際、現地の友人から「開封には今でもイスラム系の回族は多いが、かつてはユダヤ人も住んでいた。しかし、後者は19世紀半ばに『消えて』しまった。ユダヤ人は現在、世界各地で民族的同一性を守って生きているのに、なぜ、中国(開封)では同化されてしまったのか不思議である。」といった話を聞いたことがあった。

その後日本の書店で小岸昭著『中国・開封のユダヤ人』2007年、人文書院という本を見つけ、書名に惹かれて手に取ってみた。著者略歴によると京都大学名誉教授・小岸昭氏はドイツ文学専攻、ユダヤ思想研究を軸に、スペイン、ポルトガル、インド、イスラエル、ブラジル、中国などを旅し、ディアスポラ(離散)・ユダヤ人の足跡を追究している。同書は1993年夏、ドイツのミュンヘンで偶然『開封のユダヤ人』という欧文の小冊子を見つけた著者が、以後、このテーマに深く足を踏み入れて仕上げた研究成果である。

同書によると唐代(618~907年)にはすでに中国の多くの都市で、ユダヤ商人が活躍していたとみられるものの、本格的な移住を目指して開封にやってきたのは北宋時代である。開封のユダヤ人が最終的には中華民族に同化してしまった要因の1つははるばる西方からやってきたユダヤ人がこの地でアジアの他の民族や宗教集団と同じく平等の権利を得たからである。具体的には時の皇帝から開封に居住し、祖先の宗教を遵守することを許され、漢族姓を与えられたのである。

そして、もう1つの要因は、開封のユダヤ人共同体が19世紀半ばに消滅してしまうまでの200年間、清国の鎖国政策によって外の世界から完全に隔絶されて孤立状態にあったため、民族の継承の仕方がわからなくなってしまったからである。ユダヤ人の長いディアスポラの歴史の中でも、外からの圧力を受け

ずに、移住先の文化と社会に同化していった開封のユダヤ人の例は珍しいようだ。なお、小岸氏はこの本の中で、そうした同化の歴史を認めつつ、現在(2005年ごろ)でも自分がユダヤ人であることを意識する「中国人」のいることを見出している。

同書の主役は1489年に建造された石碑「重建清真寺記」である。開封にやってきたユダヤ人は1163年に当地で初めてのシナゴグ(ユダヤ教の礼拝堂)、「清真寺」(イスラム教風の名称である)を建造し、その後黄河の氾濫等で破壊されるたびに再建して民族の心のよりどころとしてきた。この石碑はそうした開封ユダヤ人の「集団的記憶」を刻印している。

この石碑の実物はかつて旧開封市博物館3階の「犹太(ユダヤ)歴史陳列」室に展示されていた。私は2006年6月1日に包公湖畔の旧開封市博物館を参観したが、そのときにはこの石碑を見ることはなかった。というより、当時、私は開封にユダヤ人がいたという事実を知らなかった。2018年8月26日に行った新館(2018年3月開館)には旧館のような特別な展示室はなかったように思う。ユダヤ人という少数民族が同化されたという歴史に対する扱いが中国で変わったのかもしれない。

なお、小岸氏の本にも引用されているが、西洋出身者で初めての現代日本文学作家として名高いリービ英雄の小説『ヘンリーたけしレウィツキーの夏の紀行』2002年、講談社(単行本)は、ユダヤ人ヘンリー(作者自身と思われる)がユダヤ人居住の痕跡を求めて開封にやって来るという物語である。

つい、つづきが長くなってしまったが、今回は開封市の市街地を離れ、東へ50キロほどの「蘭考県」を訪れた。中国の県は(日本とは逆に)市(正確には「地級市」)の下の行政単位であり、ここは「開封市蘭考県」である。と言っても、私が実際この蘭考県を訪れたのはかなり以前の2008年10月11日(行ったところは蘭考県の東坝頭郷ほか)と、翌2009年2月16日から20日までの4泊5日(城関郷、三義寨郷、紅廟鎮ほか)にすぎない。従って、以下は資料・報道を中心とした紹介である。

蘭考県は焦裕禄という人物の名前でつとに有名である。蘭考県地方史誌編纂委員会編『蘭考県誌』1999年、中州古籍出版社等によると焦裕禄は1922年8月16日山東省淄博市北園山村の貧しい農家に生まれた。1946年1月に中国共産党に加入。各地の共産党組織を経て、1953年に中国が大規模な工業建設に乗り出すと洛陽鉍山機器廠に配属された。やがて、今度は中国が農業発展に力を入れるようになると、1962年12月に農村部の蘭考県の共産党委員会に赴任して書記を務めた。

当時の蘭考は「三害」、すなわち風沙、塩碱、内撈（風と砂ぼこり、アルカリ土壌、冠水）という悪条件により農業生産が困難を極めており、農民は大変貧しかった。焦書記は治水や土壌改良を進めてこの三害を根絶し、農民の生活を改善すべく、正に身を粉にして奮闘した。また、とくに1963年は5月と8月には豪雨に見舞われ、蘭考県は甚大な被害を受けた。この時焦書記は自らの足で地域の惨状を正確に把握し、上層部に伝えて適切な援助を引き出したのである。しかし、残念ながら、肝臓の病のために1964年5月14日、道半ばにして42歳の若さで亡くなった。

焦裕禄の死去が全国的に知られるのは、かなり時を置いた同年11月になってからである。11月19日の新華社鄭州支局電を受けて、11月20日の『人民日報』の第2面に「蘭考の自然状況を変えようとする闘争に献身的に力を尽くす／焦裕禄同志は党と人民のために忠誠を尽くした／中共河南省委（員会）は全省の幹部に既に亡くなった前蘭考県委書記の人民のために奉仕するという革命精神に学ぶことを呼び掛ける」という見出しの無署名記事が載った。

しかし、焦裕禄の名前が本格的に知られるようになるのには、さらに1年以上の歳月を要する。すなわち、1966年2月7日の『人民日報』に、第1面トップと第2面全体を使った3人の記者、穆青、馮健、周原による長文の記事「県委書記の鑑—焦裕禄」が若き日の肖像写真とともに掲載されたのである。第1面の横には同時に「社論（社説）」として「毛沢東同



1966年2月7日の『人民日報』

志の良き学生—焦裕禄同志に学ぶ」も載った。

さらに、あらためてこの日の紙面の作りを見ると、第1面には各記事の見出しとは別に大きく「我們為人民而死，就是死得其所。」（「われわれが人民のために死ぬのは、死に場所を得たということになる。」）という標語が掲げられている。これらから見出しからわかるように、焦裕禄の人柄と蘭考における功績を最大級に賞賛し、政治家（共産党幹部）が見習うべき手本としている。

蘭考にはお墓、記念館等を配置した焦裕禄記念園も造られ、その後焦裕禄は政治家としてあるべき姿の象徴として、中国では知らない人のいない存在であり続けてきたが、近年、一段と注目されるようになっていく。それはその存在が現政権の基本理念、とくに政治家に清廉潔白を求めるいわゆる「八項規定」に示される政策の考えと合致しているからである。

「八項規定」とは正式名称を「活動方法を民衆と密接に結びつくように改善することに関する規定」という。この規定は政府関係者の行動をさまざまな面で正そうとするものである。具体的には

- 1.現場を視察し、住民の真の状況を理解するように。また、視察の際の接待等は簡単にするように。
 - 2.会議活動を簡素化し、実効性を高めるように。
 - 3.実質の内容のない公文書は発しないように。
 - 4.出張に関する規則を厳格に守るように。…（略）
 - 8.業務や生活待遇に関して勤勉節約を励行するように。
- といった内容を持つ。

この「八項規定」に基づいてその後、さまざま細かい規則が作られ、政府関係者、公務員の行動が大きく変容した。この規定を根拠として現政権の下で、いわゆる「ハエも虎も」の腐敗撲滅運動が大々的に進められたことは記憶に新しい。この規定の内容はまさに焦裕禄が蘭考で実践していたことである。さらに、実はこの「八項規定」は焦裕禄が策定した「幹部十不准」（「幹部がやってはならない十の行い」）に

啓発されて作られたそうである。

現在の習近平総書記はすでに複数回、蘭考を訪れ、また、たとえば、2015年1月12日には中国共産党直属の教育・研究機関である中央党校が主催する全国各県の共産党委員会の書記を集めた研修会では「焦裕禄式の県委書記になる」と題する講演を行い、現場に一番近い責任者として県委書記の役割の重要性を説くとともに焦裕禄をその理想像としてその行いに学ぶよう勧めている。

当然のことながら、焦裕禄は様々な文芸・映像作品の題材となっている。たとえば、映画では1990年に公開された王冀邢監督、李雪建主演の「焦裕禄」がある。また、同名のテレビドラマが2012年10月21日から30回連続で全国放映された。2012年11月当時、私は開封に滞在していたので、テレビで毎晩見ていた。こちらは、焦裕禄を王洛勇、その妻・徐俊雅を顔丙燕が演じている。

余談だが、中国の連続テレビドラマは、週に一回ではなく、毎日、しかも一日に何回(一回は40分くらい)か進む。この時も、一日3回ずつ、毎日放映されたので、あっという間に全て見る事ができた。また、人気ドラマは別の地方局でも同時に再放送されていることがあり、回の順番に拘らなければ複数のチャンネルを通じて一日に数回分をまとめて見られる場合もある。もっとも、今では、ほとんどのテレビドラマはWebサイト上で無料公開されているので、以上の特長はもう余り意味がないかもしれない。

近年、蘭考県自体も全国的に注目されているが、これも現政権の政策と関係がある。現政権は農村振興とそれによる貧困からの脱出(脱貧)をとくに重視している。長らく経済的に遅れた貧困県であった蘭考がここにきて急速な発展を遂げ、全国的な「脱貧」の成功例とされているのである(2017年3月27日に正式に貧困県という帽子をとる)。近年は「解密蘭考巨変」(2018年5月10日)、「蘭考十八変」(2019年1月3日)といった見出しで『人民日報・海外版』の紙面を飾る機会も増えている。因みに、後者の見

出しにある「十八」は「黄河に九の曲がり十八のくねり(彎)あり、最後のくねりを回ると私の家の門の前」という歌詞からとられている。

成功の要因として興味深い話がある。かつて「三害」対策として焦裕禄がとりわけ力を入れたのは防風防砂の効果がある植林である。とくに成長の早い桐(泡桐)を植えた。人々は彼を慕って「焦桐」と呼ぶ。写真は2008年とかなり前に撮ったものであるが、その記念碑である。桐の植林は、思いかけず、別の面で蘭考県の発展に重要な貢献をしている。1980年代に偶然、蘭考の砂地で育った桐が楽器の板材として優れた性質を持つことが判明した。いわく「呼吸する木材」とされる性質である。



焦桐(2008年、筆者撮影)

そのため、蘭考の桐は民族楽器生産者に原材料として供給されるようになったが、やがて、蘭考県内でも直接民族楽器の生産に乗り出すようになり、県によるさまざまな振興策の効果もあって、今では蘭考県の一大産業となっている。他の地域で生産されるものを含めて全国の高級民族楽器の95%は板材として蘭考の桐を採用しており、現在、蘭考には600万本以上の桐が植えられている(2019年9月9日付『人民日報・海外版』より)。

ところで近年、農村振興の担い手として、農村から出て一定期間都市で働き、経験や知識を身に着けたのち地元の農村に戻り事業を立ち上げる(返郷創業)地元出身者に期待が集まっている。そう言えば、前政権の時代ではあったが、2009年2月私が二度目に蘭考へ行った際も、街の中心部に大きな顔写真付きの看板が掲げられ、そうしたUターン創業で成功した人を「返郷創業之星」として顕彰していた。蘭考県では当時からUターン創業者に対する期待は大きかった。

蘭考出身の親しい友人もいるので、現在の新型コロナウイルス禍が収まり、中国への渡航が可能になったら、ぜひ、また蘭考を訪問してその「天翻地覆」ぶりをこの目で確かめたいと思っている。

(次回につづく)

中国語学習は半世紀以上になります。そんな私の最大の相棒は、1992年に「小学館」から発行された、北京・商務印書館との共同編集による「中日辞典」です。「中日辞典」は、中国語の単語や熟語の意味や用法を調べるものですが、それだけにしか使わないのはとても勿体ないことです。「中日辞典」には、興味深い情報がたくさん詰まっています。この「中日辞典」から気づいたおもしろい発見を、これから、いくつか紹介していきたいと思います。

第一回目はこんな内容です。

まず問題です。

次の3つの漢字に共通する特徴は何でしょう？

- ①「甬(béng)：…する必要がない、…に及ばない」
- ②「𦣻(gén)：〈方言〉滑稽である、笑わせる」
- ③「咱(zán)：われわれ、私たち」

字形ではなく、音声に関わることです。ちょっと、考えてみてください。

それでは、答えを発表します。

▲特徴1：無気音の子音 (b, d, g, j, z, zh) で始まる

▲特徴2：(-n, -ng) で終わる

▲特徴3：第2声である

答えを見て不思議に思う方も多いでしょうね。こんな特徴を持つ漢字は他にもたくさんあるのではないかと…。ところが、そうではないのです。前述の「中日辞典」に掲載されている約13,000字の親字（見出しの漢字）をチェックしたところ、(表1)のような結果になりました。

(表1)の第一列目には、6つの無気音の子音 (b, d, g, j, z, zh) を並べています。

二列目には、その子音で始まり、(-n, -ng) で終わる音節を並べています。このような音節は、「ban」から「zun」まで全部で46個あります。

三列目には、それぞれの音節の第一声の音を有する漢字の数を示しています。例えば、音節「ban」であれば、「bān」と発音する漢字が7つあるということです。この数は、あくまでも、前述の「中日辞典」によるものです。

四列目は第二声の音を有する漢字の数、五列目は第三声の音を有する漢字の数、六列目は第四声の音を有する漢字の数を示しています。

まとめますと、無気音の子音 (b, d, g, j, z, zh) で始まり、(-n, -ng) で終わる音節を持つ漢字の数は1,000字弱あります。これらを声調別に分類すると、第一声のものは381字、第三声のものは220字、第四声のものは388字に対し、第二声のものはわずか3字（前述の「甬、𦣻、咱」）しかないのです。

私の知り合いの中国人に聞いても、そういえばそうですねと答えるだけで、どうしてこんなことになっているのかは答えてくれません。

ちなみに、有気音の子音で始まり、(-n, -ng) で終わる音節の数は、「can」から「tun」まで全部で45個、これらの音節を持つ漢字の数は約850字あります(表2)。

これらを声調別に分類すると、第一声のものは252字、第二声のものは341字、第三声のものは126字、第四声のものは130字というように、極端に多かったり・少なかったりすることはありません。

どうですか、みなさん。興味があったら、知り合いの中国人たちに聞いてみてください。

表1 無気音の子音(b, d, g, j, z, zh)で始まり、
(-n, -ng)で終わる音節

子音 無気音の	(-n, -ng) で終わる 音節	第一声	第二声	第三声	第四声
b	ban	7	0	6	10
	bang	4	0	5	14
	ben	5	0	3	5
	beng	4	1(甬)	3	7
	bian	7	0	10	15
	bin	12	0	0	5
	bing	5	0	10	2
d	dan	13	0	6	20
	dang	5	0	3	9
	den	0	0	0	1
	deng	5	0	2	8
	dian	7	0	4	15
	ding	11	0	3	9
	dong	7	0	2	12
	duan	2	0	1	9
	dun	10	0	3	9
g	gan	15	0	10	8
	gang	15	0	3	5
	gen	2	1(根)	1	3
	geng	8	0	6	3
	gong	16	0	5	3
	guan	11	0	7	14
	guang	5	0	2	2
	gun	0	0	6	1
j	jian	29	0	29	30
	jiang	12	0	6	11
	jin	12	0	11	23
	jing	20	0	11	18
	jiong	3	0	9	0
	juan	8	0	3	12
	jun	11	0	0	14
z	zan	2	1(咱)	5	7
	zang	4	0	1	4
	zen	0	0	1	1
	zeng	6	0	0	5
	zong	8	0	3	4
	zuan	2	0	4	3
	zun	4	0	1	1
zh	zhan	12	0	10	9
	zhang	11	0	5	10
	zhen	22	0	9	11
	zheng	17	0	2	12
	zhong	8	0	5	7
	zhuan	4	0	1	11
	zhuang	4	0	1	6
	zhun	6	0	2	0
合 計		381	3	220	388

表2 有気音の子音(p, t, k, q, c, ch)で始まり、
(-n, -ng)で終わる音節

子音 有気音の	(-n, -ng) で終わる 音節	第一声	第二声	第三声	第四声
p	pan	4	10	0	9
	pang	4	8	3	1
	pen	1	2	0	1
	peng	7	15	1	2
	pian	6	7	1	2
	pin	2	7	2	2
	ping	3	14	0	0
t	tan	7	18	6	4
	tang	8	17	7	2
	ten	0	0	0	0
	teng	3	8	0	0
	tian	3	12	9	1
	ting	6	10	9	1
	tong	3	21	5	5
	tuan	1	3	1	1
	tun	2	7	1	1
k	kan	6	0	8	8
	kang	6	1	0	7
	ken	0	0	4	0
	keng	5	0	0	0
	kong	5	0	3	2
	kuan	2	0	2	0
	kuang	9	3	1	11
	kun	12	0	4	1
q	qian	24	14	6	11
	qiang	17	5	5	5
	qin	6	18	2	3
	qing	9	8	6	6
	qiong	0	11	0	0
	quan	5	17	3	3
	qun	2	4	0	0
c	can	3	3	5	5
	cang	6	1	0	0
	cen	1	2	0	0
	ceng	1	3	0	1
	cong	12	6	0	0
	cuan	4	1	0	3
	cun	3	2	2	2
ch	chan	5	19	10	5
	chang	7	11	7	7
	chen	6	11	3	8
	cheng	11	21	3	2
	chong	11	4	1	3
	chuan	3	6	4	2
	chuang	4	3	1	3
	chun	7	8	1	0
合 計		252	341	126	130

【わんりいの催し】

外出自粛要請に基づき、3.4月の行事は開催不能でした。5月も不透明ですが、一応予定を組みました。

ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体力を抜いて気持ちよく発声しよう！

声は健康のバロメーター！！

＊動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
- 日時：5月12日（火）13：00～11：30
6月23日（火）13：00～14：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

### 中国語で読む 漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで

読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！

録音機をお持ちの方はご持参ください。

- 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
- 日時：5月17日（日）  
6月21日（日）  
いずれも10：00～11：30
- 講師：植田渥雄先生  
桜美林大学名誉教授  
現桜美林大学孔子学院講師
- 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）  
Email: ukiuki65jpjp@yahoo.co.jp  
（有為楠）

### ■5月定例会暫定（4月定例会は中止）

- ▼5月9日（土）13：30～（一応の予定）  
三輪センター第三会議室
- ▼6月号発送は5月29日（木）10：30～  
三輪センター第二・第三会議室  
（弁当持参）

2020年は、私たちみんなの記憶に残る年になりそうですね。普段通りの生活ができることの有難さを改めて強く感じます。コロナウイルス感染拡大を防ぐために、自分たちが今出来る努力を積み重ねましょう。

～・～・～・～・～・～

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します  
年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい  
9月以降は、当年会費1100円になります。  
下記へお問い合わせください。

■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。「文化は万里につながる」の想いから名付けました。

主としてアジア各国から来日の方々と協力して文化交流活動が続け、国や民族を超えた友好を深めて来ています。会員になりますと、

- ①年10回、会報誌‘わんりい’を送付
- ②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

◆わんりいのホームページは、都合により暫くお休み致します。ネットでお楽しみ頂いていた方には申し訳ありません。ご入会いただければ、本誌を郵送させていただきます。

### ‘わんりい’253号の主な目次

|                                                         |    |
|---------------------------------------------------------|----|
| 寺子屋・四字成語(32)拾金不昧……………                                   | 2  |
| 「日译诗词」(2) 上呀……………                                       | 3  |
| 「中原旅行記」(2)……………                                         | 4  |
| 「漢詩の会」(39) 范成大の「四時田園雜興」其三十一と<br>楊万里の「閑居して初夏午睡より起く」…………… | 6  |
| 海外出張の思い出（クウェート編①）……………                                  | 9  |
| 退職ジャンボ機長の回想⑥……………                                       | 11 |
| 愛新覚羅頤珣—お寿司大好き……………                                      | 13 |
| 「中原」雑感（2）蘭考県と焦裕禄……………                                   | 15 |
| 「中日辞典」からの意外な発見①……………                                    | 18 |
| ‘わんりい’の催し・入会案内・他……………                                   | 20 |